

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Valerie M. Hudson and Andrea M. den Boer

*Bare Branches: the Security Implications of Asia's Surplus Male Population*

MIT Press, 2004, 329pp.

本書の主張は1980年代半ばから本格的に始まった性選択的人工妊娠中絶による出生性比不均衡により東アジア・南アジア諸国で結婚適齢期の男性がすでに余剰となり始め、2020年には中国とインドのそれぞれで約3千万人の適齢期前後の未婚男性（適齢期を過ぎた未婚男性を中国語で「光棍」と呼び、その英訳が bare branches）が余剰となると推計されるが、女性の上方婚傾向の結果として社会経済的地位が低い層を中心に未婚男性が滞留し、それにより各国国内の治安が悪化するだけでなく、政府が権威主義化したり、国民の目を内政への不満から国外へと反らすことを目指したりして、国際関係が不安定化する可能性があるというものである。評者はこの主張を読んで本年4月に中国の大都市で生じた反日暴動の背景にも大学生の年代における男性の余剰があったのではないかということに思い至った。しかし、本書には都合の良い事例だけで検証を試みているといった批判がある。

本書の2人の女性著者はかつて師弟関係にあった国際政治学者で、安全保障研究にジェンダー（間の不平等）の視点を導入することを企図して研究を始めたことから、第1章は「環境・人間安全保障のジェンダー次元」、第7章の結論は「高性比社会の安全保障方程式」と題されており、その間に「2. 歴史的視角からみた子孫の性選択」、「3. インドの『欠測 (missing) 女性』」、「4. 中国の『欠測女性』」、「5. 高性比社会における光棍」、「6. 21世紀における光棍」といった各章が挟まれている。本書はわが国では注目されなかったようであるが、米国では昨年5月の発刊直後から有力新聞紙上で書評に取り上げられ、人口変動の地政学的側面に対する関心を高めるのに役立ってきた。また、昨年8月には米国社会学会人口部会の優秀図書賞を受賞し、本年7月の国際人口学会大会でも米国の中国人口専門家 D. L. Poston 等により関連する報告が行われており、世界の人口学界にも大きな影響を及ぼしてきた。

中国政府も当然ながら性選択的人工妊娠中絶を禁止し、女兒を大切にしようとするとのキャンペーンを実施しているが十分に実効性が上がらないこともあるため、一人っ子政策を遵守して1子、2人娘、または（1子死亡後）無子しかいない60歳以上の農村高齢者（政策対象の1933年以降出生者）に対する社会支援（年金）制度のモデル事業を一部の省で開始し、全国規模の制度とすることを目指しているようである（実際、一人っ子政策の基礎となった法律にも記載がある）。台湾や韓国のように所得水準が比較的高くて人口規模が比較的小さい場合は、すでに台湾で大きな比重を占めている国際結婚により切り抜けることができるかもしれない。しかし、中国、インド、パキスタン、バングラデシュといった人口大国となると、供給制約から外国人女性や再婚女性との結婚で対処するのは不可能で、計数千万人の男性、特に遠隔地農村の貧困層が生涯独身となるのは避けられないであろう。わが国の場合は出生性比が正常な水準で推移したものの、すでに婚姻総数の5%を占める国際結婚を通じて間接的な影響（男性の結婚難）を受ける可能性は十分に考えられるので、目が離せない。（小島 宏）